頭の弁の、職に参り給ひて

頭の弁の、職に参り給ひて、物語などし給ひしに、「夜いたう更けぬ。明日御物忌みなるに、籠るべければ、丑になりなば悪しかりなむ。」とて参り給ひぬ。

つとめて、蔵人所の紙屋紙ひき重ねて、「今日は残り多かる心地なむする。夜を通して、昔物語も聞こえ明かさむとせしを、鶏の声に催されてなむ。」と、いみじう言多く書き給へる、いとめでたし。御返りに、「いと夜深く侍りける鳥の声は、孟嘗君のにや。」と聞こえたれば、たちかへり、「孟嘗君の鶏は、函谷関を開きて、三千の客、わづかに去れり、とあれども、これは逢坂の関なり。」とあれば、

「夜をこめて鳥のそら音ははかるとも世に逢坂の関は許さじ

心かしこき関守侍り。」と聞こゆ。またたちかへり、

「逢坂は人越えやすき関なれば鳥鳴かぬにもあけて待つとか」

とありし文どもを、初めのは僧都の君、いみじう額をさへつきて、取り給ひてき。後々のは、御前に。さて、逢坂の歌はへされて、返しもえせずなりにき。いとわろし。

さて、「その文は殿上人みな見てしは。」とのたまへば、「まことに思しけりと、これにこそ知られぬれ。めでたきことなど、人の言ひ伝へぬは、かひなきわざぞかし。また見苦しきこと散るがわびしければ、御文は、いみじう隠して人につゆ見せ侍らず。御心ざしのほどを比ぶるに、等しくこそは。」と言へば、「かくものを思ひ知りて言ふが、なほ人には似ずおぼゆる。『思ひぐまなく悪しうしたり。』など、例の女のやうにや言はむとこそ思ひつれ。」など言ひて笑ひ給ふ。「こはなどて。喜びをこそ聞こえめ。」など言ふ。「まろが文を隠し給ひける、また、なほあはれにうれしきことなりかし。いかに心憂くつらからまし。いまよりも、さを頼み聞こえむ。」などのたまひて、後に、経房の中将おはして、「頭の弁は、いみじうほめ給ふとは知りたりや。一日の文にありしことなど語り給ふ。思ふ人の人にほめらるるは、いみじううれしき。」など、まめまめしうのたまふもをかし。「うれしきこと二つにて、かのほめ給ふなるに、また思ふ人のうちに侍りけるをなむ。」と言へば、「それめづらしう、今のことのやうにも喜び給ふかな。」などのたまふ。

（第一二九段）

【口語訳】

頭の弁（＝藤原行成）が、中宮職の御曹司に参上なさって、（私と）話などなさっていたうちに、（話に身が入って）「夜がすっかり更けてしまった。明日は天皇の物忌みなので、（それに）籠らなければならないから、丑の刻になってしまったならば（あくる日になるから）きっと不都合でしょう。」とおっしゃって参内なさった。

その翌朝、蔵人所の紙屋紙を折り重ねて、「今日は（ずいぶん）心残りが多い気がすることです。夜を徹して、昔話をも申し上げて明かそうとしたのに、鶏の声に（ひどく）せきたてられて。」と、たいそう言葉を尽くしてお書きになっているのは、実にみごとだ。（それに対する、私の）お返事として、「ずいぶん夜更けに鳴きました（『鶏』と申された、その）鳥の声は、あの孟嘗君の（食客がまねたというにせの鶏の）ことでしょうか。」と申し上げたところ、折り返し、「孟嘗君の鶏は、（その鳴き声で）函谷関を開いて、三千人の食客が、やっと逃げ去った、と（書物に）見えているが、これ（私の言う関）はあなたと私が逢う（愛する男と女が逢うという名の）逢坂の関です。」と（お返事が）あったので、

「（函谷関の関守をだましたように）まだ夜が明けないうちから鳥の鳴くまねをしていくらだましたところで、（あなたと私が逢うという）逢坂の関は、（そんな手段では）決して許さないでしょう。

利口な関守がおりますよ。」と申し上げる。（すると）また、折り返し（頭の弁から）、

「（今の）逢坂の関は人の越えやすい関所ですから（夜明けを告げる）鳥が鳴かない時でも（門を）開けて（来る人を）待っているということですがね。」

と書いてあった（それらの）手紙を、初めのは僧都の君（＝隆円僧都）が、とても深く頭まで下げて（礼拝までもして）、取っていかれた。後の（手紙）は、中宮様に（差し上げた）。ところで、逢坂の歌は（頭の弁に）圧倒されて、（私は）返歌もできなくなってしまった。まったく不都合なことだ。

ところで、（頭の弁が）「あなたのお手紙は殿上人が全部見てしまったよ。」とおっしゃるので、（私が）「（あなたが私を）ほんとうにお思いになってくださっていたのだと、これでわかりました。すばらしいことなど、人が宣伝してくれないのは、かいのないことですものね。（それで、あなたは私の歌などを披露してくださったのでしょうが、私は）また見苦しい歌（文）が世間に広まるのがつらいので、あなたのお手紙は、ひた隠しにして人には少しも見せておりません。（すばらしいのを見せるというあなたの）ご厚意と（まずいのを見せないでいるという私の配慮を）比べると、（行為は逆でも相手への思いやりは）同じでは（ございましょう）。」と言うと、（頭の弁は）「このようによくものがわかっていてくれて話をするのが、なんといってもやはり人とは違っていると思われる。『（手紙を人に見せるとは、）思いやりがなくとんでもないことをした。』などと、普通の女のように言うのではないかと思いました。」などと言ってお笑いになる。（私は）「これはまあどうしてでしょうか。お礼を申し上げたいくらいです。」などと言う。（頭の弁は）「私の手紙をお隠しになったとかいうのは、これもまた、やはりしみじみうれしいことですよ。（もし人目に触れたら）どんなに不快でいやなことでしょう。これからも、そうお願いしましょう。」などとおっしゃって、その後に、経房の中将（＝源経房）がおいでになって、「頭の弁は、（あなたのことを）とても褒めていらっしゃるとは知っていますか。先日の手紙に（この間）あったことなどを述べていらっしゃいます。（自分の）思いを寄せている人が他の人から褒められるのは、とてもうれしいものですよ。」などと、まじめにおっしゃるのもおもしろい。